

1991年11月1日

## アマチュア研究者の立場から

—鳥学会への要望と提案—

呉地正行

アマチュア研究者の立場から鳥学会への要望提案など、言いたい放題書いて欲しいというのが新編集部の意図のようである。このことを頭に置いて意見を述べさせてもらうことにする。

前回の鳥学ニュースNo.40では藤岡正博氏（つくば農研センター）がプロの研究者の立場から意見を述べられていた。私も基本的には藤岡氏と同じ考えを持っている。確かに日本鳥学会の活動は近年、年を追うごとに発展しているし、今後ともさらに発展して欲しいと願っている。しかし、一方では日本の鳥学の質及びその規模が、その国力（経済力）に比べて著しく見劣りしているのも事実だ。時に国際的なシンポジウムに参加したり、欧米の研究者と文献やデータの交換などを行うと、この格差をいやというほど感じさせられる。この差をいかに縮めていくかが、日本鳥学会に課せられた最大の課題だと思う。これを達成するためにアマチュア研究者は、何ができ、何を指すべきかについて触れ、アマチュアからプロの鳥学者へ、そして鳥学会への要望等について述べていきたい。

藤岡氏も言うように、私も鳥学会に「物足りなさ」を感じる。換言すれば、全体的に「アマチュア」集団の感がとても強い。これは学会員の内アマチュアの占める割合が高いため、日本の鳥類学の現状をよく反映していると思う。

即ち、鳥に強い関心を持ちその研究を続けたいと思う人の数は多く、益々増加する傾向にあるが、その一方、鳥類学講座を持つ大学は一つもなく（私の知る限り）、プロの研究者の職場も限られている。このような社会構造が多くのアマチュア研究者を生み出している。その結果、日本の鳥学会は少数の鳥類学者と多くのアマチュアで構成され、これが「アマチュア臭さ」の主因になっているのだと思う。



日ソ共同でのオオヒシクイの標識・調査中の筆者

---

このような状況の中で鳥学(会)を将来、大きく飛躍させるためには、まず多数を占めるアマチュア自身が自己を高める必要がある。アマチュアの場合はプロと違い、時間、経済面など様々な制約のもとに鳥とつき合っ行ってかざるを得ない。しかし限られた状況の中で何が出来るかを真剣に考えるならば、必ず道は開けると確信している。私の場合、時間を制限されることにより限られた時間を最大限に活用しようという習慣が身につく、仕事への執念(熱意)が深くなり、密度高い活動ができるようになった。また鳥類学及びそれに関連する知識は必要を感じた部分から効率よく身につけるようにしている。また大会等の場では出来るだけ多くの人から知識を吸いとるよう心掛けている。

アマチュアが研究者としての質を高めようとするとき、「アマチュア臭い」今の鳥学会は最適の場だと思う。そこにはアマチュアの入り込む余地は十分にある。特に毎年一回行われる大会には出来るだけ参加し、そこで研究成果を発表する習慣をつける必要がある。調査を行ったら必ず結果を解析し、まとめ、そして学会で発表し、会員の評価を受け、それを次の調査へ活かすようにする。多くのアマチュアがこの事を心掛ければ、学会全体がより活性化され、裾野のレベル向上のみならず、プロへの刺激にもなる。そしてプロたちもその刺激によって自らの研究の質を更に高め、それを論文として学会誌へどんどん投稿し、プロらしさを見せつけて欲しい。プロはプロにしか出来ない仕事をして、学会の質を引き上げ、研究の面白さとその方法をアマチュアに示して欲しい。

鳥学会を会員にとってより魅力的な場としていくことも大切だと思う。そのためには学会員が鳥学会に何を求めているかをアンケート調査等で知ることがまず必要だろう。その時に各会員がどのような鳥種やテーマについて研究し、または興味を持っているか、また今までにどのような論文等を書いているかを申告してもらおう(毎年一回やるのがよいと思う)。このデータを学会は管理し、それらの情報を何らかの形でそれを必要とする会員に提供するシステムを作ってもらいたい。特に誰が何を研究しているのか良く知らない地方のアマチュアにとっては、これらの情報はとても役立つ。論文等はテーマ別に分類し、これを毎年一回印刷物にするのがよいだろう。学会誌が遅れているときなどはその穴埋めにもなる。

鳥学会をより魅力的にするアイデアを積極的に取り入れていけば、それが学会の発展につながると思う。魅力のあるところには必ず人が集まってくる。

---

### 関連学術集会 (1991~1992)

- 11月27~30日 国際シンポジウム「環境と内分泌からみた鳥学」(インド: No.39)
- 12月1日 第2回オオタカシンポジウム(立教大学: 本号)
- 12月4・5日 第14回極域生物シンポジウム(極地研: No.40)
- 12月19日 コンドラチェフ博士講演会(中野サンプラザ: 本号)
- 12月21日 第3回ポスター発表と講演会と忘年会(立教大学: 下記)
- 1月7日~12日 第7回北米極域ガン会議(Vallejo: カリフォルニア)

問合せ: ガンを保護する会 (〒989-55 宮城県栗原郡若柳町字川南南町16、呉地正行)

◆忘年会については、今年で3回目ですが、関東以外に住んでおられる会員の方は実質的に参加できないという声があったので、今年は学会主催ではおこないません。しかし楽しみにしておられる会員の方々も多いと思いますので、立教大学で月1度開いている“鳥ゼミ”と、日本野鳥の会研究センターで開いている“保全生物学勉強会”の共催という形で開きます。両ゼミの参加者、またはこれまでの忘年会の参加者の方には案内を差し上げますが、それ以外の方で参加・または発表希望の方は〒171 東京都豊島区西池袋3丁目、立教大学・一般教育・生物、上田恵介(03-3985-2596)までご連絡下さい。案内をお送り致します。

---

## 会頭に就任するにあたって

森岡弘之

この度、1991～92年度の日本鳥学会の会頭に私が就任することになりました。

本会の現状は、一見順調に発展しているように見えますが、実は問題が山積みしています。まず第一に、学会誌の刊行が大幅におくれています。大会がいくら盛況でも、また鳥学ニュースなどをいくら出しても、学会誌が出なければ学会は健康とは言えません。学会誌の態勢を挽回することが当面の急務です。

次に、最近になって新しい世代の研究者が輩出しているにもかかわらず、役員の人事が停滞気味であり、また体制も生物学の他の学

会と比べると旧態依然の面が見受けられます。このため、学会の改革委員会を発足させ、会頭・幹事などの再任の制限、評議員の定年制などを考慮した大幅な改革案をつくり、来年の総会で審議していただく予定です。

それから、日本鳥類目録の第6版を来年には是非出版したいものです。

以上、私が会頭としてまず取り組むべき問題を三つあげましたが、そのどれひとつをとっても大問題ですから、会員の皆様のご支援をお願いしたいと思います。

## 科目・目名の変更と亜種和名の混乱について考える

百瀬邦和

私は職場で鳥の分類表を頻繁に使っている関係上、使っている分類表はなるべく変更のないのが望ましい。分類学の新しい仕事によって、分類表が逐次変更されていくことは十分理解できるが、分類群の名称（ここでは特に和名）の変更がなぜ必要なのかについては少なからぬ疑問を感じている。鳥学ニュースNo.39によれば改訂第6版の目録で、現在鳥学会で使われている目名および科名和名のいくつかに変更を予定しているようだが、その理由はどんな所にあるのだろうか。

浦本1967（鳥：18）によれば、当時混乱のあった和名を整理するため、鳥学会に設けられた小委員会によって、科以上のグループの和名の統一案が作られた。ここでは和名の決定にあたって、4つの原則に従ったことを明記している。そして、今後それを変更したい場合には、その理由を記して会誌に投稿することを呼びかけている。

仮に現在の分類群の名称に、何らかの理由で変更の必要があるとすれば、その根拠を明らかにしてほしいと思う。そして変更にあたっては一定の基準を設けるべきであろう。ここで考えられる基準としては、たとえば以下

のような例が考えられるが、その場合にはかなりの和名が変更されることになる。

1. 和名をできる限り短くする方針をとる  
たとえばペリカン目→ウ目、コウノトリ目→サギ目またはトキ目、など
2. 和名をラテン名に合わせる  
たとえばガンカモ目→ガン目、ワシタカ目→ハヤブサ目、キジ目→ヤケイ目、など
3. 和名をその分類群の中で最も大きなグループ（科、属）に合わせる  
たとえばペリカン目→ウ目、コウノトリ目→サギ目、ツル目→クイナ目、ヒヨドリ科→シロガシラ科、など
4. その分類群に含まれるもののうち日本に生息、あるいは日本で一般的な種・グループ名を優先する。  
たとえばペリカン目→ウ目、ブッポウソウ目→カワセミ目、ハタオリドリ科→スズメ科など
5. 古い名称を優先する
6. 委員の趣味を優先する

私の考えでは、今、目名や科名の変更を検討するよりも、亜種名の検討の方に緊急性があるように思う。近年相次いで指定されてい

---

る特殊鳥類は、亜種レベルで指定されているものが多いが、その中に日本鳥類目録（改訂第5版）とは違っているものがいくつもある。日本産特殊鳥類ではイヌワシ（ニホンイヌワシ）、ライチョウ（ニホンライチョウ）、シマフクロウ（エゾシマフクロウ）、ミュビゲラ（エ

ゾミュビゲラ）などがある。さらに合衆国産、オーストラリア産、ソ連産の特殊鳥類などにも、どこからか登場した多くの亜種和名が登場し、これらが一人歩きをはじめている。日本鳥学会として、これらをはやく整理しておくべきではないだろうか。

---

## 講演会のお知らせ

1. とき：12月19日（休）午後6時00分～8時30分
2. ところ：中野サンプラザ6F（研修室6号）中野区中野4-1-1、JR中央線・総武線、地下鉄東西線「中野駅」下車、北口から徒歩3分。駐車場あり。電話：(03)3881-1151
3. 講師：アレキサンドル・V・コンドラチェフ博士（ソ連科学アカデミー北方生物問題研）
4. 演題：アナドゥリ低地の海岸地帯で繁殖する4種のガン類の採食習性、数および棲み分け（講演はスライドなどを使い、英語で行いますが、日本語通訳あり）
5. 参加費（資料代含む）：500円
6. 主催：日本鳥学会・雁を保護する会

[注意] ソ連極東地方からの来日は、未だに困難なことが多く、直前になって中止になる恐れが多少残っています。その場合、今夏現地を訪れた日本調査隊のお話を聞くことを予定していますが、あらかじめ確認されたい方は、次の日時に電話で確かめてから、来場して下さい。

12月15日（日）、16日（月）午後9～12時に（03）3390-4963＝竹下信雄

講師のコンドラチェフ博士は、レニングラード大学卒、おもに潜水ガモ類を中心とした極東の鳥類の研究に従事している若手の研究者（30歳）で、来日は初めて。ハクチョウ類の研究で知られる同名のコンドラチェフ博士とは別人です。ツンドラ歩きの名人にして、蚊の大群も恐れることなし。英語に堪能。今年7月にアナドゥリ低地で行われた日ソ米協同ガン類調査（『バードー』誌11月号参照）など、日本との交流にも熱心です。

アナドゥリ低地は、シベリアの最東部、アラスカに向かって伸びているチュコト半島の基部にあり、広大なツンドラが広がっています。ここで、マガン、ヒシクイ（亜種ヒシクイ）、ミカドガン、コクガンの4種のガン類が繁殖しています。マガンとミカドガンは同じ草の葉を好んで食べるが、一本の草でも食べる部位が違う……など、興味あるお話が聞けるはず。なお、日本にくるマガンの繁殖地は不明のままでしたが、今夏ここでマガン幼鳥16羽に首輪がつけられ、このうち1羽（A1A）が秋になって北海道の宮島沼→伊豆沼で発見されています。

---

## 日本鳥学会の改革委員会について

役員的人事交代促進の問題、本会の運営機構の問題、事務所の問題、その他本会の体制全般にわたって検討を加える目的で、評議員、幹事など以外の2名を含む8名のアドホックな改革委員会が発足した。改革委員会は当面任期を本年9月からの2年とし、来年の大会

以前に改革案を評議員会に提出し、さらに来年の総会でも改革案を審議する予定。委員長は中村登流氏、他の7名のメンバーは森岡会頭、山岸副会頭、上田恵介、福田道雄、斎藤隆史、中村司、藤岡正博。（庶務幹事）

次号（No.42）は12月31日原稿〆切り、2月1日発行です。

## 1991年度大会印象記

加藤 明子

大会に参加するのは一昨年の千葉での大会に続き二回目である。会場が交通の便のよい池袋であったせいか、参加者の数はかなり多くなったようだが、なんともアットホームな雰囲気があったように思う。発表者の顔ぶれを見ても、駆け出しの学生やアマチュア研究者からベテランまでとても幅広い。研究対象となっている鳥の種類数は多かったが、内容は生態や行動に偏り、実験によるものに比べて調査観察による研究が多かったように思う。個人的には海鳥の研究が少なかったのが残念だった。

口頭発表が2会場に分かれていたため、聞きたい発表が重なって聞けないということもあったが、会場が隣り合っていたため移動はしやすかった。しかし1つの発表が時間を超過したために、もう一つの会場の次の発表のはじめの部分聞き損なうということもあった。またスライドの字やグラフが小さかったり、線が細くて会場の真ん中あたりから見ても読み取れないことも多かった。

ポスターやビデオによる発表は、わかりにくいことや興味をひかれた部分について発表者に気軽に質問できる。残念だったのは発表の時間が一日目だけで、演者のいる時間も限られていたことだ。中には読む順序がよくわからないようなものや、図表ばかりのものや、文章ばかりで読みにくいものもあった。

シンポジウムは鳥と植物の共進化についてで、門外漢の私にも分かりやすく、特に植物を専門としている人の話は鳥の研究者とは視点が異なっているようで興味深かった。

今回発表はしなかったが、大会に参加して話を聞くことによって、いまだどんな研究がどのくらいすすんでいるのかを知ることができる、また、自分の研究のヒントを得ることもある。そして特に学生による発表を聞くと、こちらががんばらねばと大変良い刺激になった。

上田先生をはじめ大会準備委員会のみなさん、御苦勞様でした。



## 大会を終えて

上田 恵介

今回の大会には当日参加も含め、212名の参加があった。池袋という地の利だろう。大会責任者として、いくつか気づいた点を書くと、手前みそだが会場はまあまあ使い勝手がよかったと思う。口頭発表会場も、ポスター会場も適当な広さで、討論しやすい雰囲気だった。ただ、加藤さんの書いておられるような、(プロ・アマを問わず)人に聞いてもらう、読んでもらうという点で、気配りに欠けた発表があったのは残念である。日本人はプレゼンテーションが下手だというのが、それを他人事のように言わないで、自分の発表をよくするように努力していただきたい。唯一、シンポは進行の打ち合わせが悪く、自由集会参加の方々にご迷惑をおかけしてしまった。ところでいつも感じることだが、大会では素晴らしい発表は沢山あるのに、それがちっとも論文として出てこないのはなぜだろう。大会発表で疲れきってしまうのだろうか。もうひとふんばりして、学会誌に投稿しよう(または論文を書き上げてから発表しよう)。

### 成未編集委員の

#### 若手インタビュー(2)

—小藤弘美さん—

今から5～6年前までは、女性が鳥学会の大会に参加するというだけで珍しがられ、ニュースになったものである。1986年に東邦大学で行われた大会で、奈良女子大学理学部生物科のマスター2回生であった小藤弘美さんが、糞分析法によるカワガラスの食性について発表していた姿を頼もしく感じていた。以来、年に一度の逢う瀬を楽しみにするようになったが、今年も東京大会の折、一緒にボンゴレスバゲティエを食べながらお話を伺うことが出来たのでご紹介したい。

奈良女子大学の学部時代には、河川の水生昆虫を調べていたが、どうしても鳥をやりたいという気持ちを押し返すことができず、マスターを担当していた川合禎次先生に相談した。川合先生は、水生昆虫を専門とされていたが、先生の父君が愛鳥家であったこと、大学の研究施設も吉野川上流にあったこと等から、「カワガラスはどうか」と推めて下さったという。昆虫と鳥の双方をやりたい彼女は、カワガラスの食物リストやその季節変化について調べる機会を得たのだった。

そして研究生2年目にして、再び2つ目のテーマに出会うことになった。彼女によれば、「たまたま滋賀県で鳥類内分泌学会があった



のでアルバイトをしたところ、トキの繁殖のために血液ではなく、糞中からステロイドホルモンを検出する研究に出会った」と言う。ふんふんと聞きながら、糞の中の更にミクロなレベルでの話は、何やら難しそうに思えたが、現在動物生理生態学講座の大石正先生のご指導のもとで、シオノギ製薬の協力も得ながら、ドクター論文を作成中である。鳥学会誌でその成果を拝見するのが楽しみである。

### 1992年度大会のお知らせ

来年度の大会は、11月22日(日)・23日(月)の連休に大阪市立大学で開催されることになりました。多数の会員の皆様の参加をお待ち申し上げます。なお詳しい日程など決まり次第お知らせします。

大会準備委員長 山岸 哲

大会準備事務局長 堀田昌伸

## 動物行動学は何処へ

日 野 輝 明

この夏京都で行われた国際動物行動学会について印象記を書くようにとの依頼。何を書こうかなどと思いあぐねながら、何とはなしにプログラムをばらばらとめくりながら講演数などを数えてみた。講演数は全部で539題。この数は前回回の米国、前回のオランダで行われた同学会にくらべて、かなり少なかったのではなかろうか。しかしそのおかげもあってか（もちろん主催者側の配慮が大きかったのだろうが）毎日のプログラムは余裕をもって組まれており、4年前に米国での同学会で経験した超ハードスケジュール（連日夜の10時時までびっしりと講演がくまれていた）にくらべると、非常に楽な日程であった（おかげで多くのポスター講演と夜の京都を存分に楽しむことができた）。つぎに日本人による講演数を数えてみると、その数はなんと約半分の258題。そのせいかなんとなく最後まで国際学会の気分にはたれなかった感はあるが、しかしながら国際学会への参加者が日本の研究者のなかに増えてきたことはすばらしいことである。ところが残念なことに、日本の鳥の研究者による発表に限っていえば、その数は決して多くはなかった。なぜなら、鳥に関する全講演75題のうち日本人によるものはわずか21題しかなかった。つまり日本人全体では全講演の半分を占めているのに、鳥では3割にも満たないのである（ $\chi^2=11.86$ ； $P<0.001$ ）。これは何を意味しているのだろうか。日本では鳥の行動の研究者の数が他の分類群の研究者の数にくらべて少ないのだろうか。それとも国際学会で発表しようという意気込みをもった研究者が鳥では少ないのであろうか。どちらであれ、気になる問題ではある。勢いついでに、鳥に関する講演を分野別に数えてみた。最も多かったのは、「繁殖行動」に関するもので全体の約3分の1以上（27題）を占め、「托卵」に関するもの（6題）を含めるとなんと全体の44%を占めていた。次に多

かったのが「音声」に関するもの（acoustic communication, song learningなど）で、全体の約2割（16題）。「採餌行動」に関するものが1割程度（9題）しかなかったのは、少し意外であった。

さてところで動物行動学は30年代から70年代にかけてローレンツ・ティンバーゲン流の研究から、70年代から80年代にかけての行動生態学的な研究へと、その流れは大きく変化してきた。そして、その行動生態学的な仕事急速な発展期を終えて学問的な安定期を迎えようとしている今、動物行動学はこれからのどのような方向へと進んでいくのだろうか。90年代最初の今回の国際動物行動学会において、そのための明確な指針は示されていたのだろうか。まず明らかな1つの方向としては、行動の下位レベルすなわち遺伝子レベルでの研究があげられる。今回のあらゆる発表の中でも、鳥の繁殖の仕事におけるDNAフィンガープリンティング手法を用いた研究結果の数々（7題）はどれも刺激的であった。今後繁殖の仕事は、この手法を併用することなしには論議できなくなってしまうような、そんな厄介なことになりそうな気配である。もう1つは逆に、上位レベルの個体群や群集と個体の行動とがどのように関わっているかを明らかにしていく方向であろう。今回の学会では「ecology related problem」というセッションがこの分野に該当していたと思われるが、実際にはどのセッションにも入らないような講演の寄せ集めになっていて、まだ1つのテーマとしては十分には扱われていなかったようである。さらに私個人としては、「個性」に関する問題が、今後動物行動学において重要なテーマとなっていくだろうと考えている。いずれにしても、これからの動物行動学はいっそうハードに、そしてそれが故に、いっそうやりがいのある面白い学問となっていくことはまちがいない。

### ヨーロッパに残存する原生林 ポーランド、ピアロビーザの森

ポーランドとソ連との国境にまたがる面積約1230km<sup>2</sup>のピアロビーザ国立自然保護区は、高さ30m～50mのドイツトウヒ、ヨーロッパアカマツ、ヤチダモ、カエデ、ヤナギ、シナノキ等の雷と風による倒木が放置され、蘇苔類におおわれており、林床は各処に湿地を保ち、この湿原と水辺に多種類の水生生物が生息し、ナベコウ、クサシギ、ミソサザイ等の重要な生息地となっている。

私はこの度（4月30日～5月4日）の探鳥行で、この優れた自然環境下での繁殖鳥の巣立率と天敵被害について興味深い見解を得た。

同国立公園自然史博物館副館長、Dr. Luduk TOMIALOJCの研究調査によると、自然環境が優れている地域での巣立率は30%で、70%が天敵による被害で巣立不可能となっている。

ここピアロビーザ・リザーブの場合、ヨー

ロッパバイソン、アカシカ、イノシシ、オオカミ、キツネ、テン、イタチ、ヤマネコ、猛禽類らによる巣の踏付け、雛・卵捕食等がその原因である。なおこの天敵被害率70%は、アフリカでの調査で得られた被害率と同水準であったと言う。同博士によると、ポーランドでも南へ下がり首都ワルシャワ近郊では、中部ヨーロッパにおけると同様、天敵被害率は減少し、50～40%となり、自然環境の質の低下が天敵による被害の漸減につながっている、との説であった。また、最近の同地でのナベコウの動向で変化してきている現象は、越冬地アフリカに渡ってそのまま同地に定着、繁殖する個体が出てきていることである。一方クロライチョウ、キバシオオライチョウは激減中で、その主な原因は西側からのハンターの増加によると言う。今回の探鳥調査でクロライチョウ、キバシオオライチョウを除き、109種を確認した。 山口正信

### イワツバメシラミバエ の分布を知りたい

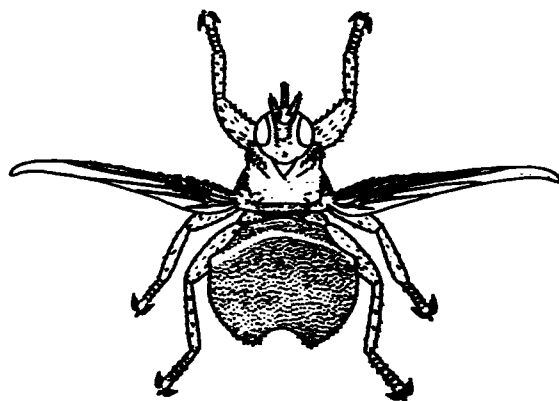
神奈川県秦野市の工場で91年7月に、イワツバメシラミバエ (*Crataerina hirundinis*) による刺咬例がありました。激痛があり直径1cmほどの赤斑ができたそうです。このハエはツバメ類に外部寄生し、羽が細く、飛ばません。ですから刺咬はツバメ類の巣近くで起こるでしょう。

旧北区に分布し、わが国では北海道、八幡平、茅野、立川などに記録がありますが、イワツバメの分布拡大に伴い、広がる恐れがあります。

そこで、今後の対策のためにこのハエの分布状況を把握したいと思います。もし、ツバメ類の巣からこれを見つけたら、小さな容器

に入れて下記にお送りいただくと幸いです。なお、刺咬例もあわせてお知らせ下さい。集計資料は皆様の前に報告いたします。

〒241 横浜市旭区中尾町52  
神奈川県衛生研究所  
矢部辰男



イワツバメシラミバエ(体長約4mm)



沖縄よいとこ一度はおいで……

琉球大学の修士を卒業後すぐ伊江島（沖縄島北部の海洋博の向かい）にきて、早や2年半が過ぎた。あと半年後には転勤になるので、山原（ヤンバル）付近を希望している。伊江島は3×8kmほどの平らな島で、中央にとんがり帽子のような城山（172m）がそびえ立っている。平坦ゆえに農業が発展しており、畑が島の8割を占め、森林は5%ほどだ。伊江中学校は離島の中では最大規模の学校で全校生徒で300名を越す。森林が少ないせいか、観察される鳥の種類数は少なく、普通にみられるのはイソヒヨドリ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、キジバト、セッカ、スズメで、次いでミフウズラやズアカアオバトといった感じである。

この島にきた当初は、子供達に自然を観察する楽しみを知ってもらい、一緒に研究をと思っていたが、忙しさ（週23時間、3年担任、○×主任二つ、卓球部顧問、島の行事）やカリキュラムの達成義務、生徒のレベルなど諸々の事情で年に数度の観察会と採集してきた動物（セミ、トカゲ、ヘビなど）を教室にもって行って見せてやるぐらいのことしかしていない。それと週末にフィールドで起きた事件やおもしろい観察など自慢げに話してあげるぐらいである（これはよく続いている）。研究の話もよくするが、ちょっと難しい行動

生態学的な話になると、半分くらいは眠ってしまう。

この島にいる間にやろうと思っていたことがもうひとつある。論文を書くことだ！しかし学生時代はフィールドワーク：デスクワーク=20：1の比の生活習慣がそう簡単に変わるはずもなく（それでなくとも週に5.5日も校舎に閉じこめられているだけでもいやなのに）、結局週末はフィールドへ出ていってしまう。部屋の壁には「急げ原稿！！」と書かれた紙が張ってあり、その下には①バンのヘルパー ②バンのnesting biology ③生態分布と個体数変動 ④イソヒヨドリの繁殖生態⑤カラス、スズメ、リュウキュウツバメのめぐら ⑥山原のforest birds ⑦伊江島の鳥類相……とタイトルだけでは20近くもあるが、書き上がった物は一部もないというお粗末ぶりである。あと半年でいったい何篇書き上げることが出来るであろうか……

現在の主なフィールドは山原でヤンバルクイナのvocal communicationについて研究中であるが、ソナグラムの機械がないのでさびしい思いをしている。バンは定期的なデータがとりにくい状態なので、8mmビデオで行動を録画している。それ以外の時は季節の生物をみている。夏休み中はベニアジサシを、9月はアカハラダカの渡りをみた。

（沖縄県伊江中学校教諭 原戸鉄二郎）

新連載「私のフィールドアイデア」

(1)チドリ一本釣り

鳥の研究の場合、個体識別が要求される調査では、先づ第一に鳥を捕獲しなければなりません。しかし捕獲は種類によってはとても難しいものです。私が調査しているイカルチドリでは、カスミ網では捕獲が難しく、ふつうは抱卵期に巣で、カゴ罟を使用して捕らえます。しかし同じ個体を再捕獲しようとする、警戒されてうまくいきません。そこで、カウボーイが使っている投げ縄のような仕掛けのものを、テグスで造り、巣にセットします。そして遠くに離れ、抱卵に帰った来た時に引っ張り、脚を絡めて捕らえます。糸の巻取りはリールと短い竿を使っているので、名付けてチドリ一本釣りと呼んでいます。再捕獲の場合はリングに糸が引っ掛かるので、とても上手くいきます。他にこの罟に必要なものは、巣近くで糸を通し、引く力の方向を変えたり、鳥が舞い上がるのを防ぐ金具を使います。また卵の破損を防ぐために擬卵と取り替えると安全です。他の種でも使用できるかもしれません。

（内田 博）

## 第2回オオタカ保護シンポジウム

主催：オオタカ保護ネットワーク・日本野鳥の会栃木県支部

後援：日本鳥学会・日本野鳥の会

日本野鳥の会栃木県支部とオオタカ保護ネットワークでは、全国的視野にたったオオタカ保護の推進とオオタカを含むハイタカ属の生態を明らかにするために、「第二回オオタカ保護シンポジウム」を開催します。

参加ご希望の方は、往復葉書に「第二回オオタカ保護シンポジウム」参加希望とお書きになり、日本野鳥の会栃木県支部まで

(〒320 宇都宮市星ヶ丘 2-2-10-101) お申し込み下さい。

期日：12月1日(日)

場所：立教大学 8号館8101教室 (池袋)

JR池袋駅西口より徒歩10分

開会：9:30 (受付は9時から)

なお5時過ぎから懇親会(12号館2F)も予定しています。

### ●学会役員の変更

4月7日に開かれた評議員会で、以下のように役員の承認・変更が行われました。

- ・庶務幹事の川内博氏が辞任し、庶務幹事に中村一恵氏、編集幹事に松岡茂氏が承認された。
- ・編集委員に立川涼氏(愛媛大学)、石居進(早稲田大学)、青木清(上智大学)の三氏が承認された。また、正富宏之氏は編集幹事を辞し編集委員となった。なお、今後の投稿原稿の送付先は松岡茂氏宛となります。

〒305 稲敷郡茎崎町松の里1 森林総研 鳥獣生態研究室

- ・監事に森岡照明、中村和雄の両氏が了承された。

- 1991年9月15日に立教大学で開かれた総会で、1991、92年度の会頭に森岡弘之氏、副会頭に山岸哲氏が承認された。前会頭中村司氏、前副会頭正富弘之氏、ご苦労様でした。

- 1991年度総会で、次の三件の大会アピールが採択された(詳細は会誌に掲載予定)。

①野生鳥類の鉛中毒に関する決議

②小笠原兄島空港建設の見直しを求める決議

③オオタカの生息する里山の保護に関する決議 尚、大会アピールを希望する場合は、事前にアピール文の原案を庶務幹事まで提出して下さい。

- 1992年度の鳥学会大会は、大阪市立大学にて、11月22日、23日に開催される予定です。初めて関西で開かれる大会ですので奮って参加して下さい。詳細は改めて掲載します。

(唐沢孝一)

### 編集後記

- 若手研究者を自認なさっている方は、どんどんインタビューにご応募下さいませ(成)。
- 標識マガンが宮島沼で見つかった日。私もその近くのマレーシア料理店におりました(K)。
- 竹富町小浜島でアカヒゲ保護される。写真ではナミアカヒゲ。渡り途中のものか(花)。

## 鳥学ニュース No. 41

1991年11月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会 〒169 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館分館内

03 (3364) 2311

発行人 森岡弘之

ニュース編集幹事 上田恵介・中村一恵

印刷所

添田印刷株式会社

ニュース編集委員

大堀 聡・花輪伸一・成未雅恵